67

衛生博覧会の電飾展示装置「工場化せる人体模型」とその系譜
――拡散するフリッツ　カーン――

竹原　直道
宗像市

1929（昭和4）年，ライオン歯磨は東京で開催した「母と子の展覧会」において，「工場化せる人体模型」と題する電飾装置を会場入口に展示した．これは当時新しい電気仕掛けの見世物として人気を博し，入場者を増やすのに一役かったという．この装置は大きな人体模型に色とりどりの豆電球を取り付けた，今日の目からみるとシンプルな仕掛けであったが，その発想はユニークで，多くの小人たちが巨大な工場化した人体を操縦しているというものであった．この「工場化せる人体模型」の発想は一体どこから得られたのであろうか．今回の発表では，その謎に迫ってみようと思う．更にこの人体模型は形を変えながら色々なところで模倣されてゆく．その変遷もフォローしてみたい．

演者はこれまで，明治から昭和初期に開催された衛生博覧会において，大衆向けに発信された様々な医学的言説に興味を持ってきた．その一部は既に，「衛生展覧会と口腔衛生思想」日本口腔衛生学会（2010），「衛生展覧会と中心感染説」日本医史学会（2011），「衛生博覧会の歯科展示」日本歯科医史学会（2012）として口頭発表した．衛生博覧会は大日本私立衛生会始め各地の医師会や大学医学部が力を入れて取り組んだこともあって，庶民レベルの衛生知識の啓蒙普及におおいに役立ったことは間違いない．しかし一方で江戸時代から続く見世物興行的要素を最初から内包していた．その展示物にはホルマリン付けの胎児標本，人間の生首標本，巨大睾丸，ミイラ，性病患者の生人形等々が含まれていた．これらの展示物こそ怖いもの見たさの庶民の関心を呼んだ理由でもあった．

実は，問題の「工場化せる人体模型」はライオン歯磨のオリジナルではない．ユダヤ系ドイツ人医師Fritz Kahn（1888–1968）が，人体を機械化工場として描いたイラストレーション，„Der Mensch als Industriepalast“（1926）の模倣である．いや模倣というより，そのものである．しかし日本の「工場化せる人体模型」にはFritz Kahnの名をどこにも見出すことができない．Fritz Kahnはなぜ最初から忘れられた，あるいは無視されたイラストレーターとして扱われたのであろうか．Fritz Kahnの一連の絵画は，その斬新かつ奇想天外な意匠から，最近のイラストレーション美術業界で再発見ないし再評価の呼び声が高い．このイラストレーションを初めて目にした昭和初期の我が国においても，その反応は同じであったに違いない．Fritz Kahnが „Der Mensch als Industriepalast“ を描いた3年後には早くも我が国で模倣され，しかも電飾装置として衛生博覧会に観衆を集める文字通り広告塔として使われ，更にそのバリエーションは拡散して行った．Fritz Kahnの影響は戦前期の科学好き少年向け雑誌「科学画報」，「図解科学」などにも見ることができる．この頃Fritz Kahnのイラストレーションを日本に紹介した一人に，かの高名な医師正木不如丘がいる．正木は自分の文章の挿絵にFritz Kahnのイラストレーションを使いながら，なぜかその名前は挙げていない．著作権意識など希薄な時代であった．Fritz Kahnはナチスに睨まれ，その著書は「焚書」の対象となった．命の危険に晒されたFritz Kahnは，アメリカへの亡命を余儀なくされた．

Fritz Kahnの不幸は戦後も続く．2009年，森美術館で開催された「医学と芸術」展覧会に展示された“The Human Body with Physiological Activities Presented as Factory Procedures”にも，イラストレーターとしてのFritz Kahnの名はない．このイラストレーションは2010年になって，ようやくFritz Kahnの名を冠して日本医史学雑誌第56巻第3号の表紙を飾った．今回の発表では，我が国において「工場化せる人体模型」電飾装置が展示された事例，および同図が次々と模倣され拡散して行く過程，また遡ってFritz Kahnの発想のルーツとなったと思われる絵画について，可能な限りこれを追ってゆく．